

東亜同文書院生が見た仏領インドシナの日本人： 1910～1939

Japanese in French Indochina from the Viewpoint of Toa Dobun Shoin
Students: 1910-1939

加納 寛

KANO Hiroshi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: kano@aichi-u.ac.jp

Abstract

The purpose of this paper is to trace the changing grass-roots relationship between French Indochina and Japan seen by Toa Dobun Shoin students.

Even though the economic relationship between French Indochina and Japan had been limited by French economic policy, many Toa Dobun Shoin students visited French Indochina in the first half of the 20th century. Down to 1920, they saw some overseas Japanese prostitutes and ex-prostitutes in throughout French Indochina. Besides, there were Japanese small companies in local cities. After WWI, the students met many representatives of the general trading companies sent to French Indochina and got help from them. Toa Dobun Shoin students obtained economic intelligence about each city or region from those Japanese.

はじめに

20世紀前半における仏領インドシナと日本との経済関係は、フランスの保護主義的な経済政策によって小規模なものに抑えられていた。1940年の北部仏印進駐以降の「日仏共同支配」期においてさえ、経済面における日本との関係は、日本の思惑通りにはいかず、比較的「小規模に終わった」（立川2000：241）。こうした状況を背景として、第2次世界大戦前の仏領インドシナと日本との関係に関する研究は、ファンボーイチャウやクォンデ等に関わる政治史的分析や、湯山による一連の経済史的研究を除けば限定的である

(湯山 2008 : 781)。しかし、近代日本において仏領インドシナに渡った日本人は「娘子軍」(日本から海外への出稼ぎ娼婦)を含めて決して少数とは言えず、日本近代の草の根的な人の移動や、彼らの海外への眼差しの変化を捉えるためには、第2次世界大戦前の仏領インドシナにおける日本人の動きを通時的に見ていく必要がある。

湯山は、20世紀前半の仏領インドシナにおける日本人の活動について、商社や中小商工業者の動向を中心に、活発な研究を展開しているが、本稿では、東亜同文書院の学生たちが最終学年に数か月にわたって実施した「大旅行」において¹⁾、仏領インドシナをどのように歩き、どこでどのような日本人と会ったかを通時的に概観することにより、湯山研究を別の側面から眺めようとするものである²⁾。

1. 仏領インドシナへの東亜同文書院大旅行

仏領インドシナへの東亜同文書院大旅行の経過は、表1のとおりである。

東南アジアを含む路線は全体の8%程度を占めていたが(加納 2017 : 168)、表1からは、このうちの多く(76.4%)が仏領インドシナを経由していることがわかる。大旅行において仏領インドシナ経由路線がポピュラーな路線であったことが読み取れる。

とくに、1923年までは、東南アジアを経由している路線の全てが、仏領インドシナを経由している。

1925年以降は、東南アジア島嶼部への調査が増加したことによって、東南アジア経由路線に占める仏領インドシナ経由路線の割合は低下するが、絶対量としていえば低下は見られず、1920年代においては、1921年と1926年の2年間を除いて、ほぼ毎年1割を超える大旅行班が仏領インドシナを経由している。

1932年から34年までの3年間は仏領インドシナを経由する大旅行班は皆無であったが、これは1931年の満州事変の勃発にともない、中国国内の「護照」発給が停止され(大学史編纂委員会編 1982 : 191)、仏領インドシナを経て雲南に入る路線が閉ざされたことによるであろう。

このように、東亜同文書院生は、1910年から1939年まで、若干の空白期を有しながらも約30年間の仏領インドシナに関する定点観測記録を残してきたことになる。本稿では、以下、東亜同文書院生が大旅行の記録として残した毎年度発行の『大旅行誌』³⁾に拠りな

1) 東南アジアにおける「大旅行」の展開については、加納(2017)を参照されたい。

2) 湯山(2006, 2019b)は、東亜同文書院生の大旅行も扱っているが、湯山(2006)では1920年の18期の動向を、湯山(2019b)では1930年代後半の動向を中心に描いている。本稿は、より通時的にその変化を概観しようとするものである。

3) 『大旅行誌』は、1908年から1943年まで刊行され、愛知大学によってオンデマンド版が復刊されている。本稿では、『大旅行誌』を出典として示す場合に、(大旅行誌 オンデマンド版巻番号：ページ番号)と表記する。

表1 東亜同文書院大旅行の仏領インドシナ経由路線

年	期	『大旅行誌』巻	総路線数*	東南アジアを含む路線数	%	仏印を含む路線数	%
1907	5	1	13	0	0	0	0
1908	6	2	12	0	0	0	0
1909	7	3	14	0	0	0	0
1910	8	4	11	1	9	1	9
1911	9	5	12	0	0	0	0
1912	10	6	10	0	0	0	0
1913	11	7	8	0	0	0	0
1914**	12	8	11	1	9	1	9
1915	13	9	11	0	0	0	0
1916	14	10	13	0	0	0	0
1917	15	11	14	1	7	1	7
1918	16	12	14	0	0	0	0
1919	17	—	14	nd	—	nd	—
1920	18	13	23	4	17	4	17
1921	19	14	20	1	5	1	5
1922	20	15	21	3	14	3	14
1923	21	16	17	3	18	3	18
1925	22	17	18	4	22	3	17
1926	23	18	15	1	7	1	7
1927	24	19	15	6	40	4	27
1928	25	20	15	5	33	4	27
1929	26	21	19	3	16	2	11
1930	27	22	17	3	18	3	18
1931	28	23	19	4	21	3	16
1932	29	24	25	0	0	0	0
1933	30	25	31	1	3	0	0
1934	31	26	26	0	0	0	0
1935	32	27	22	2	9	2	9
1936	33	28	25	2	8	1	4
1937	34	29	29	3	10	1	3
1938	35	30	30	3	10	2	7
1939	36	31	21	4	19	2	10
1940	37	—	28	nd	—	nd	—
1941	38	32	31	0	0	0	0
1942	39	32	38	0	0	0	0
1943	40	33		0	0	0	0
計			662	55	8	42	6

* 藤田（2000：334表7-2）による。

** 加納（2017）では、1914年の仏印路線の存在を見落としている。

がら、通時的に大旅行の路線とそこで出会った日本人について概観していきたい。

2. 仏領インドシナにおける経由地とルートの変化

まずは、仏領インドシナを經由した大旅行が、どのような場所を巡っていたかについて概観していきたい。

図1は大旅行経由地と鉄道開通年を示している。これによれば、大旅行経由地が、概ね鉄道路線上に分布することが多いことがわかる。もっとも、実際の大旅行では、当該区間の鉄道開設前に訪れたものもあり、図1に示した鉄道路線に関わらず、バスや自動車、あるいは船を使用して移動する場合も多かった。

表2は、主要経由地を經由した各年の調査班数を示したものであり、その変化を地図上に示したのが図2である。

経由地は、トンキン地方(ベトナム北部)に集中していることがわかる。これは、ハイフォンからハノイを経てラオカイを經由し、雲南に抜けるルートが、滇越鉄道として1910年に開通したことにより、書院生が目的地とする雲南に合理的にアプローチする路線となっていたことが大きな要因として挙げられよう(図1参照)。

また、トンキン地方では、ホンガイにおいて無煙炭が産出されており、書院生は炭鉱の見学にも多く訪れている。さらに、中国国境のドンダンまでは1902年に鉄道が開通しており、1920年代の書院生は断続的に国境付近を視察している。

一方で、アンナン地方(ベトナム中部)のビンまでは1904年に鉄道が開通しているものの、それより南へは鉄道の開設が遅れ、1920年代初頭までは大旅行の路線としてはほとんど訪れられていない。1925年にフエを中心としてアンナン地方が周遊されてからは、1920年代後半を中心にしばしば訪れられる路線となったが、フエの王都観光やホイアン(フェイホー)の朱印船時代の痕跡観光を除いてしまうと、籐の対日輸出や日本人の農園経営以外に、日本と関係する産業・商業拠点としては魅力に乏しかったようである。

コーチシナ地方(ベトナム南部)については、サイゴンが1920年以降、大旅行路線となっている。これは、トンキン地方からアンナン地方を経てコーチシナ地方に至る仏領インドシナ縦断路線の終点であるとともに、直接海路からアプローチしてカンボジアやシャム(タイ)に向かう拠点としても機能していたことによる。

カンボジアについては、1920年代後半によく大旅行の路線が延びている。プノムペンの王宮とともに、当時から名高かったアンコールワットにも5期に及ぶ東亜同文書院生が訪れた。

一方、ラオスはほとんど訪れられることはなく、1936年になって1班のみが經由したに過ぎない。交通路が限定されているうえ、産業・商業に魅力が乏しかったことによる(南

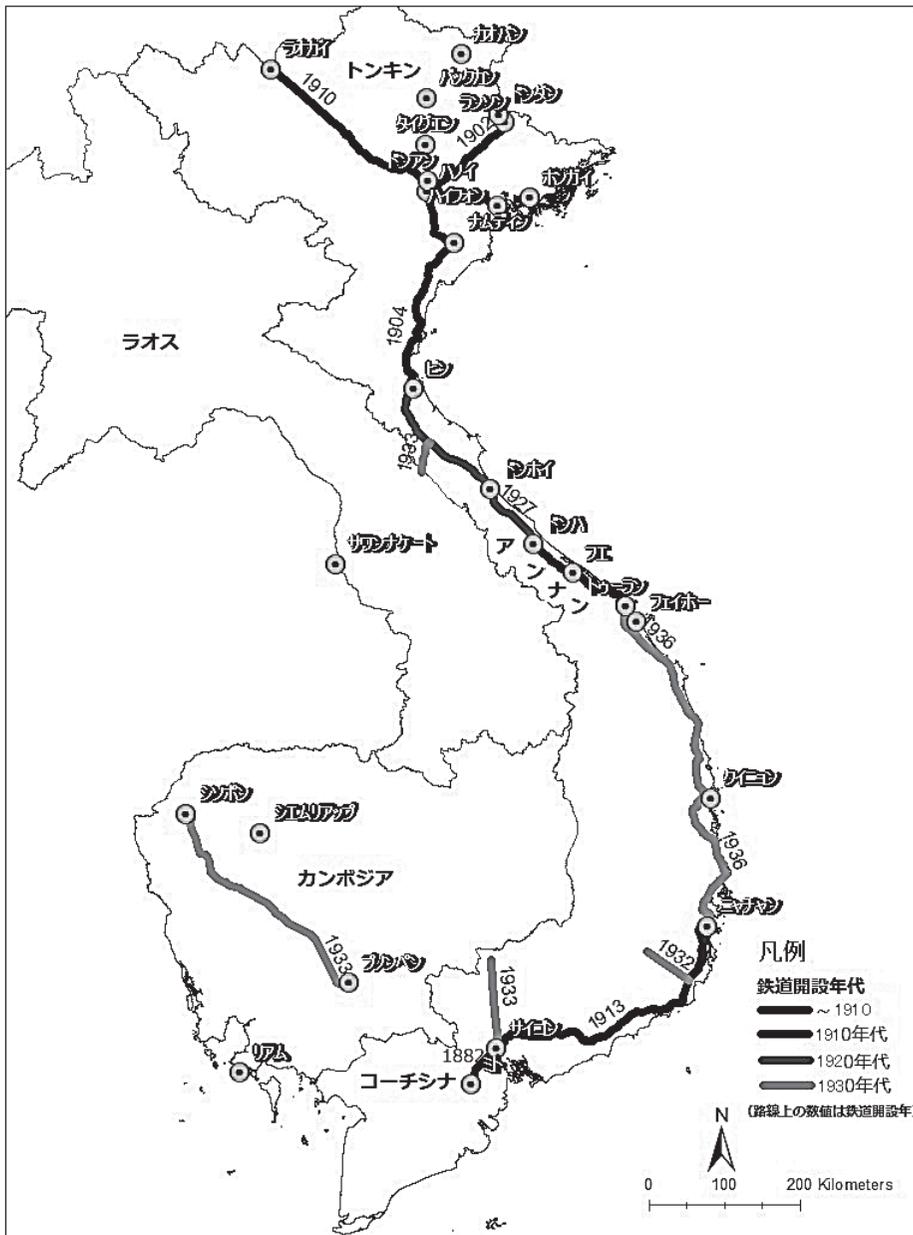


図1 仏領インドシナにおける鉄道開設年と東亜同文書院大旅行主要経由地
(出所：鉄道路線と開設年については、Doling (2012) を参照して筆者作成)

洋協会編 1942：195-197) と考えられる。

そのほか、フランス人によって開発された避暑地であるサバやダラットなどには書院生の脚は達しておらず、彼らが産業・商業の調査に重点を置いていたことが窺われる。

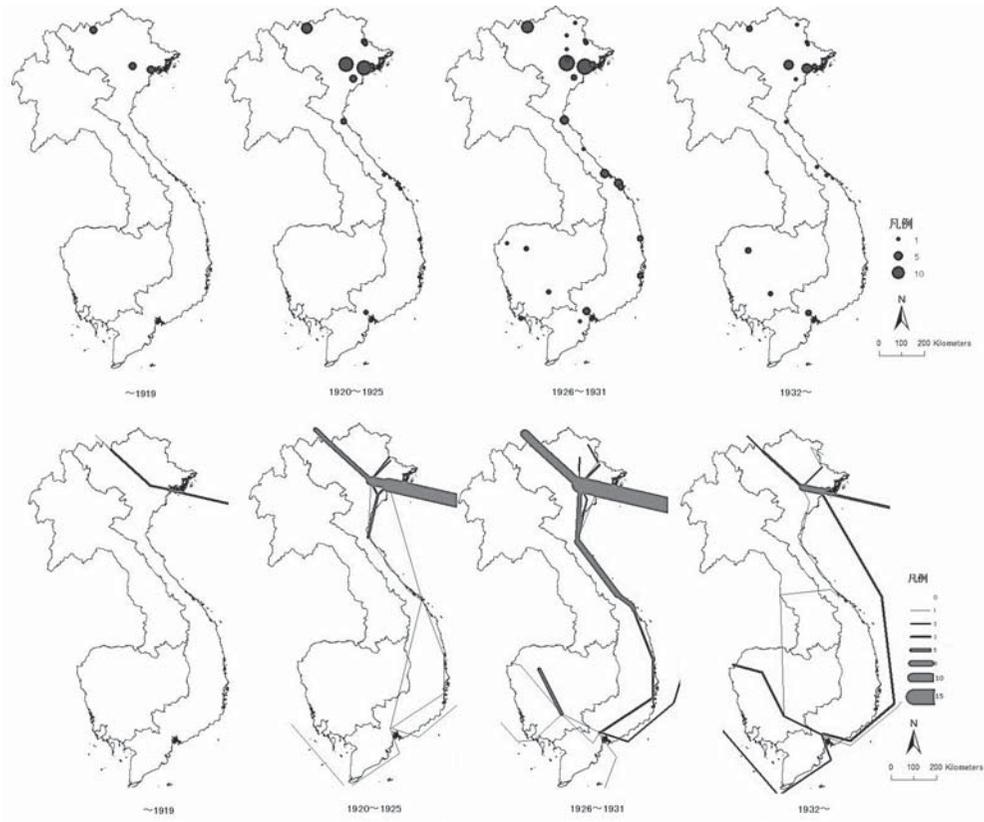


図2 仏領インドシナにおける東亜同文書院大旅行の経由地（上）と路線（下）の変化

3. 仏領インドシナにおいて接触した日本人

① 日本人との接触がなかったことが言及されている地域

日本人との接触がなかったことに言及されている地域は、トンキン地方ではカオバン（大旅行誌 20：192）とドンダン（大旅行誌 19：539）、アンナン地方ではトゥーラン（大旅行誌 22：277、23：518）とニャチャン（大旅行誌 19：253 ほか）、カンボジアではシェムリアップ（大旅行誌 20：327 ほか）とシソポン（大旅行誌 20：327）、ラオスではサワンナケート（大旅行誌 29：233）である。

② 「娘子軍」・元「娘子軍」

仏領インドシナにおける日本人数の男女別推移を示したのが図3である。仏領インドシナにおける日本人数の特徴は、女性比率がかなり大きいことであり、女性数のある程度は

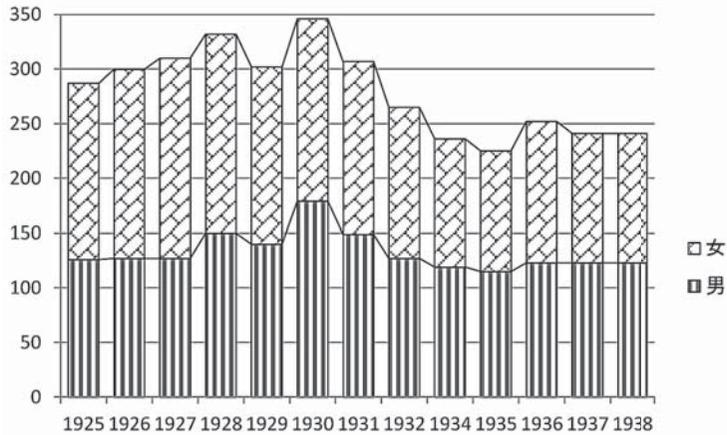


図3 仏領インドシナにおける在留日本人推定数

出所：内閣統計局『日本帝国統計年鑑』45～58より筆者作成

「娘子軍」（日本から海外への出稼ぎ娼婦）や元「娘子軍」であると考えられる⁴⁾。彼らに遭遇したり、あるいはその痕跡を見聞したりしたことは、大旅行誌の仏領インドシナ記述に随所に見られる。現地在住日本人との出会いが彼等やその痕跡のみに限定される地としては、トンキン地方ではランソン（大旅行誌 16：48、27：289）、アンナン地方ではクイニョン（大旅行誌 17：307、19：251）、コーチシナ地方ではミト（大旅行誌 20：324）、カンボジアではカンポットが挙げられる（大旅行誌 19：264）。「娘子軍」や元「娘子軍」が仏領インドシナの各地に広く分布していたことがわかる。『日本帝国第35回統計年鑑』には、1915年現在の「東京、海防、河内、西貢、其ノ他ノ各地」における男女別の人口が示されているが、それによれば、仏領インドシナ全体での男女人口比は199人：557人であるのに対して、「其ノ他ノ各地」における同人口比は30人：167人となっており、主要都市に比べて明らかに女性比率が高い（内閣統計局編 1916：79）。これは、「娘子軍」や元「娘子軍」が主要都市のみでなく様々な地域に広く分布していたことを示していると考えられる。

「娘子軍」との接触は、1920年まで確認でき、それ以降は「洋妾」等となった元「娘子軍」との接触に変化する。

なお、プノムペンでは、1930年代後半に大南公司への言及が登場するまで、1927年には元「娘子軍」と思われる天草弁の女性との接触が言及され（大旅行誌 19：260）、さらに翌年には日本人との接触がなかったことが記録されている（大旅行誌 20：327）。

4) 仏領インドシナにおける「娘子軍」および元「娘子軍」の具体像については、高橋が1920年のハノイにおける見聞をもとにハノイの「カフェー・オヨネ」の例を描いている（高橋 1937：154-159）。

③ 巡業興行師

1920年代にはラオカイで手品師の一座（大旅行誌16：51）、タイグエンでサーカス団に出会っており（大旅行誌20：181）、日本人興行師が仏領インドシナ各地を巡業していたことがわかる。

④ ハイフォン

一方、日本人の固有名詞が多く登場してくるのは、ハイフォン、ハノイ、サイゴンである。最も多くの調査班が経由・滞在した港町ハイフォンでは、書院生は多くの日本人と接触しており、在留日本人の中心に「サロン」としての石山旅館があったことが読み取れる⁵⁾。石山旅館は書院生の宿舎ともなっており、1910年から1939年まで継続して『大旅行誌』に登場し、『大旅行誌』における仏領インドシナの日本人あるいは日本人経営施設としては最も多く登場している（大旅行誌8：272ほか）。とくに女将は1920年の領事館設置までは「石山領事」と呼ばれるほど在留日本人の面倒を見た「女傑」であった（大旅行誌17：469）。石山旅館の従業員としては李枝弘の名前が、1925年に旅行した22期から1931年まで毎年『大旅行誌』に登場しており、書院生の面倒を見ている（大旅行誌17：280ほか）。石山旅館は、港まで客を迎えに来ており、通関手続の援助も行っていたようである。ハイフォンでは、石山旅館のほか、黒瀬旅館が1920年に旅行した18期生の記録に登場する（大旅行誌13：13、349）。書院生は、石山旅館のほか、雑貨商である保田洋行の世話になることが多かった。保田洋行は、1910年から1935年の記録まで頻繁に登場する（大旅行誌4：344ほか）。とくに「国眼」の名が最も多く登場するが（大旅行誌13：13ほか）、湯山によればこれは「国眼七郎」である（湯山2006：234）。国眼のほかにも竹内、横田、平井といった従業員の名前が『大旅行誌』に登場し（大旅行誌11：380、21：75、27：295）、多数の日本人従業員を抱える規模の商館であることがわかる。

ハイフォンにおいて書院生が長期にわたって仏領インドシナの情報を得ているのは、書院生が「大阪毎日新聞記者」と認識していた横山正修であり⁶⁾、1910年から1936年まで登場する（大旅行誌4：344ほか⁷⁾。大企業としては、三井と三菱への言及が見られるが、三菱は1917年の記録にしか現れないのに対して（大旅行誌11：381）、三井は1917年以降（大旅行誌11：381）、1920年に菅沼（大旅行誌13：457）、1928年から1929年にかけて小林の名も登場し（大旅行誌20：180ほか）、湯山による三井文庫資料の分析によれば

5) この様子は、岸田国土の戯曲『牛山ホテル』に活写されている。この戯曲は、石山旅館をモデルにしたものとして知られている。岸田は1920年前後に三井物産仏印出張所に勤務してハイフォンに滞在していたという（湯山2006：233）。

6) 横山は、1906年からハイフォンに在住し、台湾拓殖などと提携し、日本への輸出事業に関わったという（武内・宮沢2015：316）。

7) 1936年には書院生の訪問日に夫人が死去したことも『大旅行誌』に記録されている（大旅行誌28：492）。

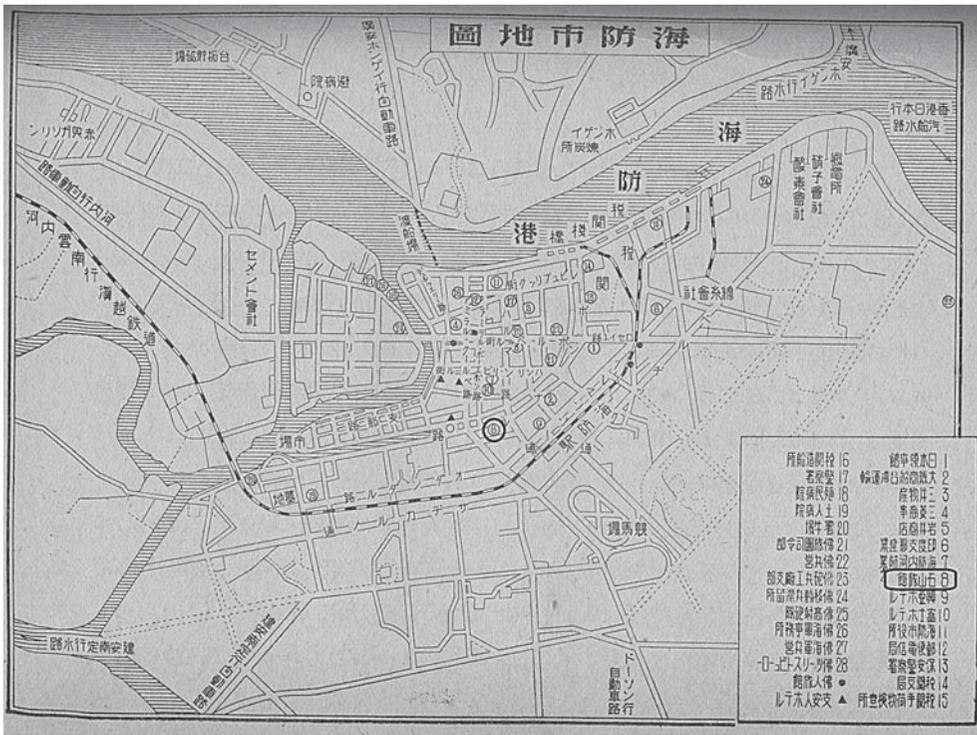


図4 1942年頃のハイフォン市街（出所：南洋協会編（1942b:55）を一部加工）
石川旅館は、海防駅の北西に見られる（図の中央やや下⑧）

1919年から1920年にかけて三井物産香港支店のハイフォン出張員主席であった菅沼邦彦と、1928年から1931年にかけてハイフォン駐在員であった小林重太郎であることが確認できる（湯山2013：112）。ここからは、ハイフォンにおいて三菱よりも三井が有力であったことが窺える。また、華南銀行についても、1922年と1925年に書院生が訪問しており、個人名が登場している（大旅行誌15：51、17：281）⁸⁾。

ハイフォンの領事館については、1920年以降1926年の記録まで登場するが（大旅行誌13：203ほか）、その後は『大旅行誌』には登場しなくなる。

⑤ ハノイ

ハノイでは、宿泊先が1920年までは鮫島旅館（大旅行誌8：273ほか）、1922年から1930年までが松下旅館（大旅行誌15：53ほか）、1931年以降が小田旅館と変遷する（大旅行誌23：236ほか）。この変遷は、大南会社の松下光広の生涯を描いた牧によれば⁹⁾、

8) 1922年には田名瀬、1925年には中山支配人と坂本の名が記録されている（大旅行誌15：51、17：281）。

9) 松下や大南会社については、牧（2012）のほか武内・宮沢（2015）などに詳しい。

天草の大網元である鮫島本家の姉妹がフランス人商人の援助でハノイで経営していた「鮫島旅館」が、同じく天草出身の松下光広に買い取られて「松下旅館」となり、松下の大南会社のサイゴンへの本社機能移転にもなって天草出身の写真館主である小田直彦に経営権を譲ったことに呼応している（牧 2012：87-95）。南洋協会編の『南洋案内』に掲載されているハノイ市街図によれば、小田ホテルは、ハノイ駅の北、鉄道沿線の東側、現在のバットダン通り付近に所在したようである（南洋協会編 1942a：559）。

1920年以降、ハイフォン領事館囑託である皆川豊次郎を訪問することが多くなるが（大旅行誌 15：3 ほか）、ハノイの領事館自体が登場するのは 1927 年であり、それ以降ほぼ毎年、領事館についての言及が登場するようになる（大旅行誌 19：128 ほか）。そのなかには、湯山が本号において詳細に言及する塩見聖策に関する言及も含まれる（湯山 2019a）。

学術面では、東洋学院に所属する研究者である牧野豊次郎が、1910 年から 1923 年の記録まで登場する（大旅行誌 4：345 ほか）。また、遠東考古学院勤務の金が、1930 年代後半の記述に登場する（大旅行誌 27：292、29：231）。留学生としては、三菱からの派遣留学生である若林の名が、1923 年と 1925 年の記録に登場する（大旅行誌 16：45）。若林は、1925 年にハノイ高等学校を卒業し、「近日中」に帰国する見通しであると述べられている（大旅行誌 17：284）。その他、1928 年にはハノイの「東法大学」に学ぶ留学生と語り合っている（大旅行誌 20：49）。

実業界では、台湾拓殖の主任である坂元と 1938 年に会ったほかは（大旅行誌 30：324）¹⁰⁾、大企業勤務の日本人との接触がほとんど見られないのがハノイの特徴である。なお、現金の受領は印度支那銀行を利用している（大旅行誌 20：39）。

書院生が頻繁に訪問しているのが、ゴム農園等を経営している高月一郎である。1910 年から 1920 年まで、書院生に現地の産業事情を語っている（大旅行誌 4：345 ほか）。湯山によれば、高月は京都大学出身で台湾総督府に勤務した後、1906 年に仏領インドシナに渡り、農園や商店の経営を行い、1923 年に出資を募る目的で日本に一時帰国した際に死亡したという（湯山 2011：62）。また、書院生は 1920 年以降、1935 年まで下村洋行の下村里寿に現地事情を尋ねている（大旅行誌 13：16 ほか）。下村は千葉医学専門学校出身でドイツに留学の予定であったが、その途中にハイフォンに居ついてしまって娼館主となり（牧 2012：72）、その後商店を始めた人物である。その他、菊地漆行の菊地に 1925 年と 1935 年に会っているほか（大旅行誌 17：287、27：292）¹¹⁾、写真師の山田や（大旅行誌 20：39）、彫刻家の石川などに会っている（大旅行誌 23：237、27：290）。

10) 「坂元」については、湯山によれば 1939 年にハノイ日本人会会長になった台湾拓殖仏領インドシナ駐在員の坂本四郎のことであり、東亜同文書院 34 期の内川大海の上司であったという（湯山 2019b）。

11) 仏領インドシナからの漆輸入については、湯山（2011）が詳しく、菊地についても詳述されている（湯山 2011：63）。

⑥ サイゴン

サイゴンでは、宿舎についての記述が少なく、領事館と大企業関係者との接触が多いのが特徴的である。領事館については、1927年以降、訪問の記事が断続的に登場する（大旅行誌 19：257 ほか）。また、商工省囑託である加藤に現地事情について教えを乞う記事が1927年から1931年まで登場し（大旅行誌 19：257 ほか）、台湾総督府の種田からも教示を得るなど（大旅行誌 23：524）、サイゴンには経済事情に強い官僚が派遣されていたことがわかる。

三井については、1920年に書院生の世話をしているほか（大旅行誌 13：199）、1927年以降しばしば個人名が登場し（大旅行誌 19：257 ほか）、三井物産がサイゴンに多くの社員を継続的に送っていたことがうかがえる¹²⁾。三井の社員には、華僑街であるショロン見学について便宜をはかってもらった記事が複数回見られ、1927年にはショロンの精米所を案内されることもあったことから（大旅行誌 19：257）、この時期のサイゴンにおける三井物産は米の輸出に関わっていたことがうなずける¹³⁾。横浜正金銀行は1930年に支店長夫妻が書院生たちの面倒を見ている（大旅行誌 22：281）¹⁴⁾。三菱については『大旅行誌』には言及がない。ただし、1925年には、サイゴンにて東亜同文書院12期の久住呂や、19期の安沢に会ったことが記録されており（大旅行誌 17：311）、久住呂省二郎は銀行関係に勤務していたことが、安沢嘉蔵は20期として卒業して三菱商事に入社しサイゴン出張員として勤務していたことが、それぞれ東亜同文書院の同窓会誌から判明することから（大学史編纂委員会 1982：304、438）¹⁵⁾、1925年当時のサイゴンにおける三菱の存在をうかがうことができる。

現地の中小企業としては、塩田商会の塩田が1925年以降1938年まで登場するが、1925年には日仏製糖の所属（大旅行誌 17：311）、1928年には南洋協会の所属とされており（大旅行誌 20：322）、1930年によく塩田商会主として紹介されている（大旅行誌 22：281）。1930年には松下洋行が登場し（大旅行誌 22：281）、1937年には大南公司を訪問している（大旅行誌 29：247）。

12) 具体的には、1927年には福島、1928年には守田、1938年には高原、1939年には本地の名が『大旅行誌』に見られるが（大旅行誌 19：257、20：322、30：330、31：351）、湯山が作成した三井物産の出張員名簿と照合すると、1927年には福島深良、1939年には本地正一がサイゴンに駐在していたことが確かめられる（湯山 2013：112）。

13) サイゴン米の日本への供給については、湯山（2013：111）を参照されたい。

14) ただし、湯山によれば、1931年4月以降、1941年6月までは横浜正金銀行のサイゴン進出は空白期を迎えることになる（湯山 2013：109）。

15) ただし、湯山の研究による三菱の仏領インドシナ出張員名簿には、安沢の名は見られない（湯山 2013：117）。

⑦ その他の地域

その他の地域では、炭鉱見学に訪れたホンガイにおいて1920年から1937年まで西原喜松の名が登場する（大旅行誌13：14ほか）。西原は夫妻で滞在しており、旅館も経営していたようである（大旅行誌19：356ほか）。ホンガイでは、西原のほか、1928年に香港日高洋行の船の事務長である松村に（大旅行誌20：213）、1937年に三井の出張員に（大旅行誌29：230）、それぞれ話を聞いている。

雲南に抜ける滇越鉄道の経由地である国境のラオカイでは、1910年には当地唯一の邦人として江尻の世話になっているが（大旅行誌4：346）、1914年には江尻に並んで末松が現れ、1928年まで末松が妻とともに書院生の面倒を見るときともに旅館を営むようになっている（大旅行誌8：273ほか）。ラオカイにおける末松への言及は1929年以降消滅し、ラオカイでは日本人と接触しなかったことが明記されるようになる（大旅行誌27：218ほか）。末松という人物は1936年にラオス国境付近のコーヒー園で働く人物として書院生の前に現れており（大旅行誌28：496）、1937年の記述ではドンハから60kmの地点にある末松の住居を自動車で訪ね宿泊させてもらっているが（大旅行誌29：233）、ラオカイにいた末松と同一人物であると考えることができよう。

ナムディンでは、1920年にオテルジュガールと雑貨商を営む40歳ばかりの大柄な女性に世話になっているが（大旅行誌13：200）、これは大南公司を興した松下光広の仏領インドシナ渡航のきっかけをつくった義姉の橋口セキであったと思われる（牧2012）。『大旅行誌』によればナムディンには在留邦人は2名のみで、もう1名は日章洋行の黒島であった。黒島は、1920年から1928年まで『大旅行誌』に登場しており、夫妻でナムディンに滞在していたようである（大旅行誌13：203ほか）。

ビンでは、1925年から1931年まで雑貨店主の奥村愛子が、細帯に浴衣を着た「女傑」「女丈夫」として登場する（大旅行誌17：290ほか）。ビンでは、そのほか、元「娘子軍」と思われる女性たちや（大旅行誌13：201、23：510）、1928年に自動車事故で死去し、ドンホイやフエから在留邦人が葬式に集まったという農園主の林についての記述が見られる（大旅行誌20：45）。

ドンホイでは、1927年に籐を買い入れるために滞在している広島県人の倉田と出会っており（大旅行誌19：242、244、20：207）、その後もフエなどで会っている（大旅行誌23：510）。

フエでは、写真師で雑貨商も営む中山が、1925年から1937年まで『大旅行誌』に登場し、自動車を出したり自宅に書院生を宿泊させるなど、書院生の世話をしている（大旅行誌17：291ほか）。妻も仏領インドシナに渡っており¹⁶⁾、夫妻ともに岡山県人であるとい

16) 『大旅行誌』の記述から、妻は1921年頃に仏領インドシナに渡ったと考えられる（大旅行誌17：291）。

う（大旅行誌 17：291）。中山のもとには清友という日本人がいることが、1927年と1928年に記録されている（大旅行誌 19：245、20：46）。

プノムペンでは、1937年と1939年に大南公司を訪問しており、1939年の記述では唯一の邦人として陳という人物の名が挙げられている（大旅行誌 29：242、31：355）。

結び

以上、東亜同文書院生が20世紀前半の約30年間にわたって『大旅行誌』に記録した仏領インドシナにおける経由地と、そこで出会った日本人について、通時的に概観してきた。

その結果、仏領インドシナと日本との経済関係は比較的に小規模であったものの、東亜同文書院生にとっては雲南への経路でもあることから、東南アジア経由路線のほとんどが仏領インドシナを経由しており、とくに雲南に入るための滇越鉄道沿線を中心としたトンキン地方に路線が集中していることがわかった。1920年代になると、トンキン地方以外のアンナン地方やコーチシナ地方に大旅行路線が及ぶようになっていったが、とくにサイゴンは経済的中心地であることに加えてカンボジアやシャムに向かう拠点としても経由されていたことが明らかになった。1920年代後半になるとカンボジアにも書院生の足跡が残されることになったが、ラオスについてはほとんど経由されることがなかった。

日本人との接触については、1920年頃に消滅していった「娘子軍」が、仏領インドシナの広範な地域に分布していたことが確認できた。現地を基盤とする日本人の中小の商店や農園等も、ハノイやサイゴンといった大都市やハイフォンやラオカイといった交通の要衝においてはもちろん、それ以外の地域にも分布しており、元「娘子軍」の女性たちはフランス人の夫とともに、男性たちは日本において結婚した妻とともに、現地に根を張っていたことも読み取れた。一方で、領事館や三井・三菱といった大企業も、大都市や交通の要衝を中心に駐在員を送っていたが、そのあり方も都市によって異なっていることが確認できた。ハイフォンでは、石山旅館が在留邦人の中心地として機能し、三井物産が有力であったことがわかった。ハノイでは、領事館設置以降は領事館への言及が継続していくことから領事館の存在感が大きく、また研究者や留学生の存在が特徴的であるが、日本の大企業の存在感は書院生の記述からは感じられなかった。サイゴンでは、領事館と三井を中心とした大企業関係者との接触が多く見られるのが特徴的であった。こうした在住日本人の地域差は、日本人の仏領インドシナに対する関わりを反映するものであるといえよう。

東亜同文書院生の経験を通して20世紀前半の仏領インドシナを概観してきたが、今後の課題としては、書院生の仏領インドシナに対する視線や感覚の変化について、東南アジアにおける英領地域やシャム等との比較をしていくことによって、日本と東南アジアとの

草の根の関係性の歴史を立体的に確認することが挙げられよう。

付記：本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「近代日本青年の「南方」体験：中国人コミュニティとの接触の実像」（課題番号：15K01896）および愛知大学人文社会学研究所「南方における近代日本青年の足跡」研究会による成果の一部であり、2018年3月、本稿に登場する地の多くを実際に訪れることができた。記して御礼申し上げる。

史料

東亜同文書院『東亜同文書院大旅行誌』1～33 愛知大学（雄松堂出版オンデマンド）

参考文献

- 大学史編纂委員会 1982『東亜同文書院大学史：創立80周年記念誌』滬友会
- Doling, Tim. 2012. *The Railways and Tramways of Viet Nam*. Bangkok: White Lotus.
- 加納寛 2017「書院生、東南アジアに行く：東亜同文書院生の見た在留日本人」加納寛編『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ
- 牧久 2012『「安南王国」の夢：ベトナム独立を支援した日本人』ウェッジ
- 内閣統計局編 1926～1939『日本帝国統計年鑑』45～58
- 南洋協会編 1942a『南洋案内』南洋協会
- 南洋協会編 1942b『仏印案内』目黒書店
- 立川京一 2000『第二次世界大戦とフランス領インドシナ：「日仏協力」の研究』彩流社
- 高橋敏太郎 1937『三井物産の思出』教文館
- 武内房司・宮沢千尋 2015『西川寛生「サイゴン日記」：1955年9月～1957年6月』風高社
- 矢野暢 1975『「南進」の系譜』中央公論社
- 湯山英子 2006「東亜同文書院生の仏領インドシナ調査旅行」『植民地文化研究』5
- 湯山英子 2008「仏領インドシナにおける日本人社会：日仏共同支配前を中心に」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版
- 湯山英子 2011「仏領インドシナにおける対日漆貿易の展開過程：1910年代～1940年代初めの現地日本人商店からの考察」『社会経済史学』77-3
- 湯山英子 2013「仏領インドシナにおける日本商の活動：1910年代から1940年代はじめの三井物産と三菱商事の人員配置から考察」『経済学研究』62-3
- 湯山英子 2019a「日中戦争下の仏領インドシナと中国：外務書記生のアジア体験から」『文明21』42
- 湯山英子 2019b（近刊予定）「東亜同文書院生が見た日中戦争初期の仏領インドシナ」『同文書院記念報』